

小石川春日町 天堀屋七右衛門七十

直に歸り、聖堂の土手に倒れ、明七時迄打臥す、

〔臨時客應接〕給仕酒の肴を、小皿へ取て出さば、大平にても鉢井の類にても、盛たる姿に倣ひ、略

〔鳩翁道話前〕側をみれば、飯蛸いひだが七ツ八ツ、南京のどんぶりの中に、車座に座禪してゐる、略

〔饅頭屋本節用集左財寶〕砂鉢サハチ

〔書言字考節用集七器財〕砂鉢サハチ、支那所調磁盆

〔和漢三才圖會三十一庖厨具〕盤中

按俗用皿字、中而小盤爲皿、深盤爲鉢、淺盤爲淺鉢、左並磁器也、

〔明良洪範十七〕又或時紀伊賴宣卿方へ、忠輝卿ヲ招カレ饗應有シ時、如何故ニヤ、忠輝卿兎角機嫌

宜シカラズ、賴宣卿心配シ給ヒ、自身盃ヲ進メナドシ給ヘド、酒モ飲ミ給ハズ、然ルニ賴宣卿用事

有テ、正木小源太ト云小姓ヲ呼ビ寄セ給フニ、忠輝卿其小姓小源太ヲ御覽ジ給ヒテ、賴宣卿ニ所

望シ玉ヒケル、賴宣卿早速御承知有リケレバ、夫ヨリ大イニ機嫌宜ク成リ玉ヒ、興ニ乗ジテ傍ニ

有合セシ大砂鉢ヲ取ラセテ、酒ヲナミ、トツガセ、兩度迄飲ミ玉フトゾ、

〔北里隣の疝氣〕大名の留守居も、大かたは手前の宅にて、之つそに寄合、料理等随分かく、もし茶

屋にて寄合と云へども、今は焼物に鯉節ひくことさへ、常と心得、傘などひくことあり、又は吸物

椀皿、さ鉢、その外下直成る道具、煮物には、更に火を不入、なまもの持歸り、家内のさいとする、

〔好色三代男五〕夢かと怪し村雨女郎

二階より、禿とおぼしき女の童銀の銚子に、金繪の砂鉢持て、女郎も姥も、引請々々のみしが、略

〔元祿太平記五〕ながめことなる高雄の紅葉  
鹽漬の楊梅卷、鯛に南蠻かけて、枕本に重ねたる砂鉢吞するを見て、病らはしやんすなど、いたは